

# バイオパシー協会 会報

Vol.56  
2017年12月



## Contents

咽頭癌の体験 ..... 2



## 咽頭癌の体験 白石利行様（男性68歳 福岡県宗像市在住）



私は病気をきっかけに、既にバイオ・ノーマライザーを愛用していた息子に教えてもらって飲み始めました。病名は咽頭癌です。

2017年4月初めの桜の季節のこと。声がガラガラになり息苦しくなつて病院に行きました。調べると既に腫瘍で気道が詰まっていたとステージ4と診断されました。医師にはとにかく手術するようにと勧められました。何しろ既に気道が詰まっている訳ですから、早いところ取り除かなければ声も出なくなり呼吸もままならなくなります。

ですが私は、手術は極力避けたいと考えていました。なぜなら、手術してしまうと声が出なくなってしまうと言われたからです。声が出なくなると言われたことは大変なショックでした。私は長距離トラックのドライバーです。ですから、もし声が出なくなれば配送先のお客さんと話ができないし、会社からの電話にも出られません。自分に何かあっても連絡ができません。仕事ができなくなるのは困るのです。

それで、なんとか手術しない方法での治療をお願いしました。残る治療法は放射線と抗がん剤です。それでダメなら切るという方向でした。もちろん放射線や抗がん剤も副作用がありますが、バイオ・ノーマライザーの抗酸化力にかけてみようという気持ちでした。それまでも少しバイオ・ノーマライザーのことは知っていて、使ったこともあったので抵抗はありませんでした。

言い渡された治療方法はかなりハードなもので、なんと放射線治療と化学療法を同時進行で行うという方法でした。それで友人にバイオパシー協会に電話してもらって、アドバイスを受けながらバイオ・ノーマライザーの摂り方を工夫しました。ハードな治療に備えるため、入院するまでに12gを40分間隔で4回摂取するボンピングという食べ方を、3日に1回のペースで合計3回行いました。ボンピングしない日は毎晩12g食べました。

5月の連休が明けてから治療がスタートしました。36回の放射線治療を毎日。抗がん剤はアービタックスという分子標的薬を1週間に1回です。

バイオパシー協会に聞くと、抗がん剤を使っている間はバイオ・ノーマライザーを摂れないと言われましたが、放射線と抗がん剤の同時進行ですから、「体が持つのか？」どうしても気がかりです。強風の中で綱渡りをするような、なんとも空恐ろしい状況です。バイオ・ノーマライザーが抗がん剤の効力を消すとすればそれも困るので随分悩みましたが、抗がん剤を使ったその日だけはお休みして、そのほかの日は12g食べ続けることにしました。



病院にもバイオ・ノーマライザーを飲んでいいか尋ねてみました。医師はただのパパイヤのお菓子の様なものだと思ったようで、「飲んでいいですよ」と言われました。成分表示を見ても添加物がないし悪くないと思ったからのようです。

6月8日には放射線でただれた状態で喉が痛くて食事が難しくなりました。しかし何とか痛み止めを飲んで食べていました。とはいえ医師はむしろその程度で済んでいることを驚いていました。普通ならそれだけの治療をすると痛みで食事は難しいようです。

7月に入っても副作用が怖いので一応入院していました。ですが、実際は「副作用が軽すぎておかしいな」と言われていたのです。血圧は上がってしまいましたが、放射線と抗がん剤両方したのに髪の毛も抜けませんでした。

一時期医師からは、「思ったより副作用が軽いので、もう少し強い抗がん剤に切り替えましょうか」と言われてしまいましたが、バイオ・ノーマライザーで副作用が抑えられていることを確信していたので、これ以上強いものは使いたくないとお伝えして、お断りしました。

そしてついに退院前の診察です。

口腔外科の部長さんに診察してもらったところ、癌が見当たりません。

「これは消えてるんですね。抗がん剤がよく効いて治ったようですね」と言われました。

ステージ4と言われていたのに、数ヶ月で寛解状態！驚くと共に本当にうれしかったです。



退院してからも12gを食べ続けていました。9月の検査でも寛解状態との診断でした。さらに10月には、なんと仕事復帰が叶いました。ステージ4の宣告から半年後には寛解状態で仕事復帰が果たせたのは、本当にバイオ・ノーマライザーのお陰だったと思います。これまで、お酒にタバコ、ハードな仕事、長距離トラックのドライバーなので食事もお外食続き・・・そんな生活を続けてきました。体に毒になっていたことを痛感しています。これからは、しばらくは月に一度の通院を続ける予定です。そしてお酒やタバコは控えつつ、再発予防のためにバイオ・ノーマライザーを愛用しながら体を大切にしていきたいと考えています。

### ★ 抗がん剤について

抗がん剤・放射線の働き、バイオ・ノーマライザーのがん・化学療法との学術研究、化学療法を受けているときの食べ方については、会報53号で詳しく説明していますが、簡単に再確認しましょう。

- ・抗がん剤や放射線はがん細胞を直接殺すことができるので、有効な治療法である。
- ・多くの抗がん剤と放射線は、活性酸素の酸化力を利用してがん細胞を殺しているため、バイオ・ノーマライザーの強い抗酸化力が、この酸化作用を打ち消してしまう。
- ・抗がん剤の効果が持続している間はバイオ・ノーマライザーを食べない。

白石さんは、抗がん剤と放射線治療を受けながらバイオ・ノーマライザーを併用した例ですが、抗がん剤を使った当日だけお休みする、という食べ方であったにもかかわらず、がん細胞がすっかりなくなっていたという結果に驚かされます。



### ★ 進化する抗がん剤

抗がん剤はそれ自身ががんを殺す能力を持つもので、現在では約100種類あると言われます。「がん細胞」に対する働き方で、「細胞障害性抗がん剤」と「分子標的治療薬」に大きく分類されます。

白石さんの治療に使われたアービタックスという抗がん剤は、近年分子生物学などが急速に進歩して開発され2013年から発売された分子標的薬です。今回は、現在の抗がん剤について勉強しましょう。

### ★ 細胞障害性抗がん剤 …… 働きによって次のように分類されます。

#### ①【アルキル化剤】 代表薬：シクロホスファミド（エンドキサン）、ブスルファン等

毒ガスの研究から開発された、最も古くからある細胞障害性抗がん剤の代表的な薬。遺伝情報の伝達など、生命の本質に重要な役割を果たしているDNAにアルキル基と呼ばれる原子のかたまりを付着させ、らせん状にねじれた2本のDNAを異常な形で結合させる。するとDNAの遺伝情報が障害され、またDNAそのものも損傷を受ける。細胞が分裂してがん細胞が増殖する際には、アルキル化剤が結合した場所でDNAはちぎれ、がん細胞は死滅する。

#### ②【代謝拮抗剤】 代表薬：フルオロウラシル、ペメトレキセド等

増殖の盛んながん細胞に多く含まれる酵素を利用して、増殖を抑え込もうとする薬。構造がDNAの基質と酷似しており、複製時に関与する酵素が間違っただけで二セモノに働きかけ、結果としてがん細胞の増殖を抑える。

DNA複製に必要な葉酸の代謝を阻害してDNAの複製を妨げる「葉酸代謝拮抗薬」（ペメトレキセドが代表的）と呼ばれものもある。

#### ③【プラチナ製剤】 代表薬：シスプラチン、カルボプラチン、オキサリプラチン等

プラチナ（白金）が含まれている製剤で、現在の抗がん剤治療で重要な役割を果たしている。DNAの2本鎖に白金が結合して橋を架けたような状態になり、DNAの複製を妨げ、その結果がん細胞が分裂できなくなり死滅する。がん細胞を自滅（アポトーシス）へ導く働きもある。

④【**トポイソメラーゼ阻害剤**】 代表薬：**イリノテカン、エトポシド**等

全ての細胞分裂の際にはDNAが切断されそれが再結合するというプロセスがあり、その反応を助けるトポイソメラーゼという酵素の働きを阻害することによって、DNAが切断されたまま再結合されなくなるため、がん細胞は死滅する。

⑤【**抗がん性抗生物質**】(アントラサイクリン系) 代表薬：**ブレオマイシン、ドキシソルビシン**等

がん細胞を死なせる抗生物質で、がん細胞の細胞膜を破壊したりDNA鎖を切断するなどして、DNAまたはRNAの複製・合成を阻害する。

⑥【**微小管阻害剤**】 代表薬：**ビンクリスチン、パクリタキセル**等

細胞分裂が行われる際、複製されたDNAは微小管という管状のたんぱく質によって引き寄せられ、分裂後のそれぞれの細胞に分けられる。この薬が微小管に結合することで働きを阻害し、細胞分裂を妨げてがん細胞を死滅させる。



★ **分子標的薬** 代表薬：**セツキシマブ、トラスツズマブ**等

近年の分子生物学の急速な進歩により、がん細胞だけが持つ特異的な性質を分子レベルでとらえ、がん細胞の増殖、浸潤、転移に関わる分子を標的として、がん細胞の増殖を抑制するとともに転移をも抑制することを目的に開発された。副作用が少なく治療効果を高めると期待されている。

**分子標的薬の主な作用機序**

①シグナル伝達阻害

細胞分裂や増殖などの過程において必要不可欠であるシグナル伝達系を阻害して、細胞増殖を抑制する。

②血管新生阻害

がん細胞は急激な細胞増殖を行うのでより多くの栄養を必要として、自分のところへ新しく血管を作る。この血管新生を阻害してがん細胞を栄養不足とし、細胞増殖を抑える。

③細胞周期調節

細胞分裂において、細胞は「G1期→S期→G2期→M期」と細胞周期が回転することによって増殖する。この細胞周期の回転を、ある部分でストップさせて細胞増殖を抑制する。

**トラスツズマブ**(商品名：ハーセプチン)は、がん細胞の表面にあるセンサー(HER2タンパク)にくっついて、増殖に必要な物質を取り込めないように作用する。いわば抗体のような働きをする。

**アルキル化剤、プラチナ製剤、抗がん性抗生物質**は**フリーラジカル**を発生して細胞障害作用を示す抗がん剤として知られています。また、**代謝拮抗剤**は酸化作用が関与しないメカニズムですが、抗酸化剤との併用は有害である可能性も指摘されています。

しかし、**トポイソメラーゼ阻害剤、微小管阻害剤、分子標的薬**は、**バイオ・ノーマライザー**と併用しても問題はないと考えられます。

ただし、抗がん剤を数種類組み合わせるケースもあるので、抗がん剤治療を開始する際は**バイオパシー協会**のカウンセリングを受けて、**バイオ・ノーマライザー**の使い方を確認することをお勧めします。

発行：特定非営利活動法人 **バイオパシー協会**

〒337-0043 埼玉県さいたま市見沼区中川929-2

TEL：050-3339-6628

FAX：050-3339-9591

E-Mail：info@biopathy.jp

http://www.biopathy.jp

平成29(2017)年12月 発行

発行責任者 小林 隆 非売品：会員学習用

この会報は、会員の皆様にバイオパシー協会の活動目的である、医療情報の提供を目的として制作しています。

商品の購入は自己責任でご決定くださるよう、お願いいたします。

この会報の著作権は、バイオパシー協会に帰属しています。いかなる目的であれ、無断で使用することを固く禁じます。